

## 閻魔堂

閻魔堂の内部にある大きな木製の像は、仏教における冥界の裁判長、閻魔大王です。この像は、14 世紀に遡り、流れるような衣をまとい、平らな笏を持つ閻魔大王を描写したものです。この像は二体の従者を伴い、さらにおんばさまと呼ばれるより小さな多くの木像の女神に囲まれています。これらの小さな像は、かつておんばさまに捧げられた姥堂から移されたものです。閻魔大王もおんばさまも、立山周辺で発展した立山信仰の中心人物です。

立山信仰では、信奉者が死と再生を象徴する旅、霊峰巡礼を行うことにより救済されるとの信仰があります。19 世紀の信仰の最盛期には、毎年 6,000 人もの人々が巡礼に訪れたと考えられています。その象徴的な旅は閻魔堂から始まり、巡礼者は閻魔大王の前に自らを差し出し、あの世で自分の魂が裁かれるのと同じように裁きを受けます。閻魔大王と対面した後、巡礼者たちは近くの布橋を渡ります。これは、死後三途の川を渡って冥界に入ることを表しています。そこから巡礼者たちは山を登り始めます。

19 世紀後半までは、巡礼に参加できるのは男性のみであり、女性は神聖な山への入山が禁止されていました。しかし、女性たちは、布橋灌頂会と呼ばれる儀式を通して死後の悟りの境地を求めて祈りを捧げることができました。この儀式は、目隠しをし、白装束を被って布橋を渡るというものでした。女性たちは、対岸にある姥堂を訪れ、目隠しを外し、遠くに聖峰が見えるところでおんばさまに救済の祈りを捧げるのでした。布橋灌頂会は 130 年の中断

の後、1996年に復活し、3年に一度行われています。

立山巡礼は、閻魔堂から徒歩5分の富山県立立山博物館に展示されている、精妙な絵巻（立山曼荼羅）に描かれています。館内には、布橋灌頂会の様子を表したジオラマや最近行われた儀式のビデオ映像もあります。